

## 指定討論 2

### 音声言語教育振興についてのメモ

#### 音声言語教育振興における二つの問題点

氏原 それでは私の方から発表いたします。私の役目ということで、先ほど司会の上谷さんや甲斐さんとも相談しまして、だいぶ意見が多岐に渡っていますので、私の意見を申し上げるといよりは私の方で少し問題点を整理して、この後の話し合いの場につなぐ役目をしようということになっております。

#### 教師の役割の見直し

今何人かの先生からお話があったのですが、大きく分けると二つの側面があるのではないかと伺っておりました。一点目としては最初に問題提起者の甲斐さんの方から、全て教師の問題であるという指摘がありました。そして、音声言語教育については全て教師の問題に還元できる、という問題意識から今回の提案を構成しているということがあったような気がします。教師の問題、教師がどう関わって、音声言語教育を実際の授業の中で組織していくのか。そういう点で教師についての役割ということを引き直さなければならぬのではないかと。この問題は甲斐さんがもう一つ挙げております、優れた実践であるけれどもそれが十分に引き継がれないという問題とも関わるわけです。音声言語教育に関する優れた実践があるにしても、それを再現するということは、その授業を実践した人とかなり近いレベルの音声言語教育の能力を持っていないと再現不能であろうと私は考えております。そういった問題も含めて一点目としては教師の問題が挙げられます。

#### 音声言語教育で実際に何を学習するか

そして二点目に、ではなぜ音声言語教育は不振だったのか、ということについて様々な立場からの話し合いだったと思います。甲斐さんの方からは要するに音声言語教育と言ったときに、文字言語教育ということと対比しながらあまりにも捉え方がおおざっぱだったのではないかと。音声言語教育、話しことばの教育という中で実際に何をやるのかということが結局明確にならなかった。私自身の問題意識ということ言えば、音声言語というのは自然に身につく、つまり日本人の話しことばは自然習得できるのではないかと、というかなり強い捉え方があると思うのです。いずれにしても音声言語教育の不振の原因として、その領域がはっきりしていなかったことが大きいのではないかと。それについての試論、試みを考えてみたのが 12 の領域に分けたものと位置付けられます。

それから小森さんの指摘についてもやはり同じだったのではないかと。なぜ不振だったのかというと、国語科教育という流れの中で音声言語教育で何の能力をどのように育てていくのか、ということが結局見えなかったのではないかと、ということが挙げられていると思います。そういった問題を挙げながら、中教審などの答申によって音声言語教育で何を指すか、ということが明ら

かになってきているのではないか。そういった国語の能力の見方・考え方をもっとはっきりと国語科の先生方に知ってもらうことが第一歩ではないかというのが小森さんの提案の一つです。それから先ほどのもう一つの教師の役割から言えば、生徒に対する、すなわち学習者に対する見方を教師の方で変える必要があるのではないか。つまり、これもやはり音声言語教育の振興と絡んで教師のあり方の問題としてあるのではないかというご指摘だったと思います。

それから中瀬さんのお話の中では「話す・聞く」において、結局その一番根底にあるのは中身の問題ではないかということだったと思います。この中身をどう捉えていくかというところが常に意識されていないといけな。そうでないと「話す」ということが単なる活動になってしまう。これは見方を変えればそういったことが明らかになって来なかったために、音声言語教育は表面的な活動に留まり、生活と結び付いた形で根づいてこなかった。そういう意味で、やはり音声言語教育の不振の原因が指摘された。それからそういったことを明らかにして、指導をしてこなかった教師の問題なのだというふうにも言えると思います。

それから杉本さんのお話についても、音声言語教育の問題としてこれは実践面から捉えたお話だったと思います。つまり話しことばの基本的な能力が実際に欠けている。そういったことがこのアンケートの中からも明らかになりますし、その中で何が一番求められているのか、というところ「わかりやすく説明、報告する能力」です。ですから、この辺りは実際に音声言語教育が不振だったことの事実的な裏付けとして位置付けができるのではないかと思います。

そして学校の教師の問題という二点目の方で言えば、市ヶ谷小学校の先生が同僚の教師の話を聞いていてもなかなか分かりにくいとか、あるいは全員がそういった指導を受けるべきであるとか、そういう問題。やはりここにも教師の意識の問題が非常に関わっているのではないかと思います。

## 日本人の言語観における話しことば教育の位置付けとは

そして浜本さんのご指摘で言えば、やはり井戸端会議とか無駄話とか、そういったことを見直していく必要があるのではないか。そこから話しことばの教育を考えてもいいのではないか。つまりことばを使ってものをしゃべったり、ことばを使って相手とコミュニケーションをとっていくということの、要するに位置づけというか価値というか、そういったものが従来の日本人の言語観の中には欠けていたのではないか。

それから西尾先生や柳田国男先生の優れた提唱があっても、結局受け継がれていかないというのは、日本人の言語観という問題が大きく関係しているのではないかということだったと思います。ですからこれは音声言語の不振という問題と非常に関わるわけです。教師の問題で言えば、話したり聞いたりする経験の場を設定する能力が教師に欠けているというご指摘もあったと思います。

最後に話しことばと書きことばの関連の問題などがありました。大きく言えば教師の問題と音声言語教育がなぜ不振だったのか、そういうことに関わっているいろいろな考えが展開されたと思います。ですからこの後、その二点を中心にどういったところで打開できるのか、あるいはどういったことが有効なのか、そういった点を話し合いで深めることができればというふうにご指摘しております。以上です。